



P2▶3

ハーベスト・タイム イスラエル学 (39)

P4▶6

エンドタイム・ミニストリー 石田 吉男

P7

シオンとの架け橋 石井田 直二

P8

お知らせ 事務局より

巻頭言

「私たちの力」は、
何のために用いるべきなのか？

アルコ・イリスミニストリーズ 代表 早川 衛

すると、【主】は彼の方を向いて言われた。「行け、あなたのその力で。あなたはイスラエルをミディアン人の手から救うのだ。わたしがあなたを遣わすのではないか。」(士師記 6:14)

上記は、主がギデオンに述べたことばの一部である。筆者は、この箇所を読む度に、主がギデオンに言われた「あなたのその力」とは何なのか、と問い続けてきた。ギデオンは、下記の聖句が示すとおり、イスラエルの敵ミディアン人から隠れていた。そのような男に、イスラエルをミディアン人から救う力があつたのか。それが筆者の問いであった。

さて【主】の使いが来て、アビエゼル人ヨアシュに属するオフラにある樫の木の下に座った。このとき、ヨアシュの子ギデオンは、ぶどうの踏み場で小麦を打っていた。ミディアン人から隠れるためであった。(士師記 6:11)

上記から読み取れるギデオンの力とは何か。それは、敵から隠れ、自分のために働く力であった。しかし、ギデオンには、もうひとつの力があつた。士師記 6章 12～13 節には、次のように記されているからだ。

【主】の使いが彼に現れて言った。「力ある勇士よ、【主】があなたとともにおられる。」ギデオンは御使いに言った。「ああ、主よ。もし【主】が私たちとともにおられるなら、なぜこれらすべてのことが、私たちに起こったのですか。『【主】は私たちをエジプトから上らせたではないか』と言って、先祖が伝えたあの驚くべきみわざはみな、どこにあるのですか。今、【主】は私たちを捨てて、ミディアン人の手に渡されたのです。」

ギデオンは、主の使いに質問した。それは、不平や不満を表すことばで満ちている。つまり、ギデオンには、主に対し文句を言う力、あるいは、自分の考えを主張する力があつたのだ。主がギデオンに言われた「行け、あなたのその力で。あなたはイスラエルをミディアン人の手から救うのだ。わたしがあなたを遣わすのではないか。」に、筆者は、主のユーモアを感じる。主は、ギデオンに「あなたが今、自分のために用いている力と、文句や主張を述べる力をイスラエルの救い

のために用いよ」と言いたかつたのではないか。

LCJEは、イスラエルの救いの働きに携る者たちのネットワークである。これに加わる者たちは、イスラエルの救いだけでなく、異邦人の救いをも願い、そのためにも働く者たちである、と筆者は信じる。そんな私たちの力は、今、何のために用いられているのだろうか。上記のギデオンのようであってはならない。私たちは「自分」のためではなく、また「文句」や「自分の主張」だけを述べるために持てる力を用いるべきではない。主がギデオンに「あなたはイスラエルをミディアン人の手から救うのだ。」と言われたように、イスラエルの救いのため、また異邦人の救いのために用いるべきである。

次に、ギデオンは「ああ、主よ。どうすれば私はイスラエルを救えるでしょうか。ご存じのように、私の氏族はマナセの中で最も弱く、そして私は父の家で一番若いのです。」と言った。つまり、ギデオンは、イスラエルを救う方法を主に尋ねたのだ。そして、自分自身について述べたのであつた。そんなギデオンに、主は、こう言われた。「わたしはあなたとともにいる。あなたは一人を討つようにミディアン人を討つ。」私たちがギデオンのように、自分自身について説明するが、救いのためには、何もしないことがある。そのような時に神の計画は進展しない。「自分」がヘリくんだり、見えなくされる時にこそ、神の計画は進展する。イエスもヘリくんだり、十字架にまで従われた。そして、引き上げられ、見えなくされた。しかし、神の計画は進んだ。聖霊が注がれ、教会が誕生したからだ。

本年のLCJEニュースに関し、特徴的であつた事柄のひとつは、数ヶ月間に亘り、シモン・アミット氏の文章とそれに対する応答文章が掲載されたことである。筆者も当該テーマについて複数回、関連記事を書かせていただいた。上記小論は、それを踏まえたものである。すなわち、イスラエルと異邦人の救いに召されている者たちには、今、持てる力を何のために用いているのか、を自問する必要がある、と言いたい。ギデオンのように主の戦いを避け、自分自身のためにだけ持てる力を用い続けるべきではない。私たちの力は、収穫を生み出さないもののためではなく、収穫を生み出すもののためにこそ用いられるべきだ。



『イスラエル学』(39) ~組織神学の失われた環~ (最終回)

「現代イスラエル」(第2回)

ハーベスト・タイム・ミニストリーズ 佐野 剛史：訳

本記事は、アーノルド・フルクテンバウム博士著『Israelology (イスラエル学)』の日本語訳です。本書は、イスラエルの過去、現在、将来を論じ、これまで組織神学の盲点であったイスラエル論を体系化した先駆的著作です。

【今回の内容】本連載は、今回で最終回となります。長きにわたってご愛読くださり、ありがとうございました。本連載ではこれまで、フルクテンバウム博士のイスラエル学から、次のような内容を学んできました。

A. 過去のイスラエル

1. イスラエルの選び
2. 無条件契約
3. モーセ契約とモーセの律法
4. イスラエルのレムナント(残れる者)

B. 現在のイスラエル

1. 神の国プログラム
2. イエスがメシアであることを否定した結果と影響
3. 無条件契約
4. モーセ契約とモーセの律法
5. イスラエルと教会
6. 現代イスラエル

そして今回が、「現在のイスラエル」というテーマの1つのクライマックスである「現代(国家)イスラエル」の聖書的位置付けを扱った内容となっています。

世界が政治的、宗教的に混迷を深める中、今後ますます重要になってくる終末論は、未連載の部分である「将来のイスラエル」の各章で論じられています。本書の翻訳はすでに完成し、ハーベスト・タイムから出版されています。終末論に興味のある方は、ぜひ書籍となった『イスラエル学』をお読みください。いま混迷を極めている終末論が、イスラエルという視点で見ると驚くほど明快に理解できることに皆様も気付かれることと思います。

【未連載の箇所の内容】

B. 現在のイスラエル

7. ローマ9:1~11:24, イスラエルのレムナント
8. ヘブル人クリスチャン/メシアニック・ジュー
9. 新約聖書のヘブル人クリスチャン/メシアニック・ジューに関する書

C. 将来のイスラエル

1. イスラエルと教会時代
2. イスラエルと患難時代
3. イスラエルと再臨
4. イスラエルとメシア的王国
5. イスラエルと永遠の秩序

【今回の内容】

1948年に起こったイスラエル独立は、聖書を信じない人の中でも現代の奇跡ととらえられることが多い。この歴史人類を見ない大事件を、聖書を信じる神学者はどうとらえているのか。ここでも、神学的立場によって意見が割れている。また、たとえばディスペンセーションナリズムといった同じ神学的立場に立つ人々の間でも、現代イスラエルの位置付けについては意見が一致しない場合がある。その混乱を解く鍵は、イスラエルの帰還は「2度ある」と考えることにあるとフルクテンバウム博士は教える。

今回は、エゼキエル 20:33~38 とエゼキエル 22:17~22 を引用し、ユダヤ人の最初の世界的帰還は、不信仰の状態、裁きの準備のために起こると論じた。今回は、それとは別に、聖書には2回目の世界的帰還があることが記されていると博士は論じる。

6. 現代イスラエル

エゼキエル 36:22~24 は、主にイスラエルの新生について取り扱っている箇所だが、そこでも帰還が新生の前に起こると明言されている。

22 それゆえ、イスラエルの家に言え。神である主はこう仰せられる。イスラエルの家よ。わたしが事を行なうのは、あなたがたのためではなく、あなたがたが行った諸国の民の間であなただが汚した、わたしの聖なる名のためである。23 わたしは、諸国の民の間で汚され、あなたがたが彼らの間で汚したわたしの偉大な名の聖なることを示す。わたしが彼らの目の前であなたがたのうちにわたしの聖なることを示すとき、諸国の民は、わたしが主であることを知ろう。——神である主の御告げ。——24 わたしはあなたがたを諸国の民の間から連れ出し、すべての国々から集め、あなたがたの地に連れて行く。

同じ問題を取り扱ったもう一つの箇所が、イザヤ 11:11~12 である。

11 その日、主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りを買い取られる。残っている者をアッシリヤ、エジプト、パテロス、クシュ、エラム、シヌアル、ハマテ、海の島々か

ら買い取られる。12 主は、国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。

この箇所で語られているのは、千年王国の準備のために、信仰にあって行われる帰還である。この信仰にあって行われる帰還は、「再び」行われる国際的な帰還だと言われている（訳注：英語訳聖書の ASV では「again the second time (2 度目に)」と 2 度目であることが明確に示されている）。ここで湧き上がるのは、「1 度目はいつ起こったのか」という疑問である。バビロン捕囚からの帰還を 1 度目と解釈することはできない。バビロンからの帰還は、この箇所で行われているような多くの国からの国際的な帰還ではなかったからである。そうすると、1 度目の国際的な帰還とは、裁きの準備のために行われる帰還ということになる。国際的な帰還は 2 度あって、この箇所では 2 度目の方を強調していることは明らかである。2 度目の帰還は信仰によって行われるが、1 度目はそうではない。

これまで、裁きの準備として不信仰の中で行われる帰還について語っている聖書箇所と、祝福の準備として信仰にあって行われる帰還について語っている聖書箇所を対比させつつ示してきた。以上の箇所では、裁きの準備として不信仰の中で行われる帰還の時期を大患難時代の前とは特定していなかった。しかし、ゼパニヤ 2:1～2 は、不信仰の中で行われる帰還が大患難時代の前に起こることを明言している。

1 恥知らずの国民よ。ごぞって集まれ、集まれ。2 昼間、吹き散らされるもみがらのように、あなたがたがならないうちに。主の燃える怒りが、まだあなたがたを襲わないうちに。主の怒りの日が、まだあなたがたを襲わないうちに。

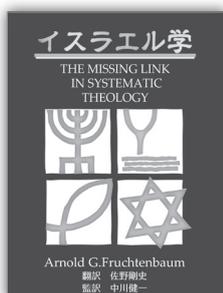
この箇所の前のゼパニヤ 1:14～18 では、「主の大きな日」と呼ばれる時代の特徴が描写されている。「主の日」とは、旧約聖書で大患難時代を指す最も一般的な呼び名である。ゼパニヤ 2:1～2 では、「主の大きな日」が来る前に起こる出来事について語られている。1 節では、イスラエルの国民が集まるようにと呼びかけられている。この節から、不信仰の中で行われる帰還のことを指していることは明白である。2 節では、「～ないうちに」とい

う言葉が、大患難についての前の箇所との関連で 3 回繰り返されている。そのうちの 1 回は、「主の怒りの日」という言葉そのものを指して使われている。これまで見てきた聖書箇所では、裁きの準備として、不信仰の中で起こる帰還について語ってきたが、この箇所は、この不信仰の中で起こる帰還が、大患難時代が始まる前に起こると明言している。

もう一つ、現代イスラエルには聖書的根拠があることを示す証拠があるが、それについては「イスラエルの将来」の部で詳しく説明する。それは大患難時代が始まる時と関係している。大患難時代（携挙ではない）は、7 年間の契約が締結された時点から始まる。この契約は反キリストとイスラエルの指導者の間で結ばれる。そのため、そうした契約が締結されるということは、ユダヤ人国家のユダヤ人指導者がいることが前提となっている。そのような契約が結ばれるには、ユダヤ人国家がその前に樹立されていなければならない。そのため、大患難時代が来る前にユダヤ人国家が存在している必要があるのである。

以上見てきたように、ユダヤ人国家の再興は、裁きの準備として、不信仰の中で集められる帰還のことを語っている預言の成就である。

ごく一部の例外を除いて、ディスペンセーションリストの大多数はイスラエル国家を支持してきた。一部の人は行き過ぎをして、実質的にイスラエル国家に白紙委任状を渡し、イスラエル政府が行うあらゆる決定を支持しなければならないと感じている人々もいる。これはイスラエル国家がなくなってしまう方がよいと考えている契約神学者よりも確かにましたが、あまりよろしくない態度である。人間の作ったほかの政府と同じく、イスラエルも政治的な間違いを犯し、道徳的な失敗を犯すときもある。ディスペンセーションリストは、そうした間違いを支持すべきではない。特にイスラエル政府が、ユダヤ人信者にほかのユダヤ人と同じ権利、イスラエルに移民する権利を与えていないことは非難されてしかるべきである。しかし、イスラエルの生存権と約束の地の所有権の問題になると、ディスペンセーションリストは黙ってはいられない。ユダヤ人国家を支持することは、ディスペンセーションリズムの根幹となる基本姿勢である。（連載終了）



LCJE ニュースに連載されてきたフルクテンバウム博士『イスラエル学』が、ハーベスト・タイムから発売されています。

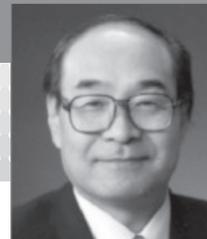
価 格 ▶ **3,000 円 (税込)**

お問い合わせ ▶ **ハーベスト・タイム**

☎ 055-993-8880 / info@harvesttime.tv

極東のリバイバルとイスラエルの救い

キリスト聖協団札幌教会 オリーブチャペルオリーブチャペル牧師 石田 吉男



「そうして、西のほうでは、主の御名が、日の上るほうでは、主の栄光が恐れられる。主は激しい流れのように来られ、その中で主の息が吹きまくっている。『しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中のそむきの罪を悔い改める者のところに来る。』—主の御告げ—」（イザヤ59・19～20）

子どもの教会で毎年開催しております「オリーブチャペル再臨待望聖会」は、今年で第10回目を迎えました。今回は、これまでの再臨待望聖会について振り返りながら、そこで現された主の恵みと御業について共有させていただきたいと思っております。

1. 再臨待望と私

ロシアの小説家、アントン・チャーホフは、その著作『サハリン島』にて、自分が3年間滞在了した当時のサハリンを「流刑の島」として詳しく描写しています。帝政ロシア、そしてソビエト時代を通じて約200年もの間、ロシア全域から政治犯や思想犯、犯罪者たちが送り込まれたこの島全体について、「まるで監獄であり地獄のように耐え難い地であった」と記しています。

私自身、サハリン伝道に導かれる以前は、この地域に対して無関心、というよりも、むしろロシア（旧ソビエト連邦）そのものに対して、「神様の存在を否定する共産主義の国」「日ソ不可侵条約を破棄して北方四島を略奪した」などの悪い先入観に強く支配されていたのです。

そのような私が、どのようにしてロシア・サハリン宣教に挑戦するようになったのか。それは、この再臨待望聖会の取り組みがきっかけでした。ただ主の再臨を待ち望むだけでなく、その成就のために具体的に何をなすべきか、聖霊様の強い迫りを受けたのです。

私の心の中には長い間、過去の歴史に対して一つの大きな疑問がありました。「日本の敗戦によりサハリンから引き揚げた信仰の先輩たちの現地での労苦は、すべて無駄に帰してしまっただけではないか？」

そんな私の心を揺るがしたのが、次の聖書のみことばでした。

「神は正しい方であって、あなたがたの行いを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心さを示して、最

後まで、私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれるように切望します。それは、あなたがたがなまけずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです」（ヘブル6・10～12）

このみことばから、神様は過去の先輩たちの労苦を決して忘れてはならない、現在もその恵みと祝福が継続し、そして将来的にご自身の御業と栄光が現れるために必要とされていたことを悟りました。

神様の摂理に対して無知でいたことを悔い改めたヨブのように、私は驚き、新たな信仰の目が開かれる体験をしたのです。

2. サハリン宣教への志

私のサハリン宣教に対する重荷は、次のみことばによって確信へと変わりました。

「そうして、西のほうでは、主の御名が、日の上るほうでは、主の栄光が恐れられる。主は激しい流れのように来られ、その中で主の息が吹きまくっている。『しかし、シオンには贖い主として来る。ヤコブの中のそむきの罪を悔い改める者のところに来る。』—主の御告げ—」（イザヤ59・19～20）

このみことばには、「日の上るほうでの主の栄光」と、「シオンに贖い主として来られ、ヤコブのそむきの罪を悔い改める者のところに来る」という二つの内容がリンクして記されています。私の目は、この事実により釘付けになりました。この二つの内容は将来必ず起こる出来事として、イザヤは神様から啓示を受け、預言したのです。そしてこの二つは、「日の上る地域でのリバイバルとイスラエルの救い」に要約することができます。

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。」（マタイ6・33）

イエス様が聖書全体で最も大切な命令としておられるのが、この「神の国」と「神の義」を追い求めることです。この二つは切り離したり、どちらかが優先されるものでもなく、あくまで相関関係にあります。相関関係とは、二つの物事が密接に結び合わされ、決して切り離すことのできない状態であることを意味します。

「神の国」とは神様の支配、そして「神の義」とは神様の御心を示します。神様の支配を求める者は神様の御心を求め、神様の義を求める者は、神様の支配を求めます。この二つを、切り離してはならない重要な関係にある一つのセットとして受け止め、第一に祈り求めることが、それぞれの具体的な実現につながることを理解しました。

この理解は、前述のイザヤ59章の理解へとつながりました。「日の上る地域のリバイバル」そして「イスラエルの救い」この二つは、相関関係にある事柄として理解し、求めていく必要があります。

この理解は、ただ聖書のみことばの一部分だけでなく、聖書全体にも通ずるものです。その確信は、ヨハネ黙示録7章



を読むことでさらに深まりました。

「また私は見た。もうひとりの御使いが、生ける神の印を持って、日の出るほうから上って来た。彼は、地をも海をもそこなう権威を与えられた四人の御使いたちに、大声で叫んで言った。『私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。』それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であった。」
(黙示7・2～4)

このみことばには、「日の出る方から上ってきた御使い」と「14万4000人のイスラエル人の救い」という二つの事柄が出てきますが、これらもまた相関関係にあります。

これまで「日本と世界のリバイバルの鍵は、イスラエルの救いを祈ることにある」という教えに立ち、イスラエルの救いを優先的に祈り、そして支援してきました。しかし実際には、まず「日の上る地にリバイバルが起こり、そのリバイバルはイスラエルの救いをもたらす」という順序になっています。この二つの事柄は、どちらが前後するものではなく、相関関係にあるもの、つまり決して切り離してはならない重要な真理なのです。

「イスラエルの救いを祈り求める者は、日の上る地域のリバイバルを祈り求め、日の上る地域のリバイバルを祈り求める者は、イスラエルの救いを祈り求める」。この相関関係に基づく真理が、聖霊様によって明確に啓示されたのです。

サハリンは、文字どおり日の上る（日の出る）地域にあります。サハリンの教会では、聖書が示す「日の上るほう」とはサハリンのことであると信じています。これまで「日の上る地域」を一つの国に限定していた狭い考えから脱却して、より広い視点に立ち、聖書全体から理解する必要があるのです。日の上る地域とは、サハリンを含めたロシアやアジアの一部、そして日本も含めた極東地域全体を指すと解釈できるのです。

「主は激しい流れのように来られ、その中で主の息が吹きまわっている。」(イザヤ59・19)

終末の時代、極東地域に想像もつかないほど大きなリバイバルが起こります。それがイスラエルの救い、そしてやがてキリストの再臨の成就へとつながるのです。

「そこでふたりは話し合った。『道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。』」(ルカ24・32)

旧約聖書のみならず新約聖書にも、この日の上る地である極東地域のリバイバル、そしてイスラエルの救いが、明確に記されている！この啓示は、ロシア・サハリン宣教が、神様から自分に与えられた使命であることへの確信を深めてくれたのです。

3. ロシア・サハリン宣教のスタート

ロシア・サハリン宣教の目的は、極東の地に起こる神様の御業である「日の上るところのリバイバルとイスラエルの救い」を中心に据えています。

エンドタイム・ビジョン・ミニストリーの活動を開始して以来、ユジノサハリンスクのピーター監督やポロナイスクのエレナ師をはじめとする諸先生方、兄弟姉妹の協力のもと、宗教ピ

ザを取得して、規模や教派の違いにかかわらず、現地のさまざまな教会を訪問し、全力投球で奉仕をさせていただきました。その数は、南のコロサコフヤアニワから最北端のオハまで、合計約40箇所を上ります。

各集會では、聖霊様の助けを頂いて語らせていただいたメッセージに対し、会衆が笑ったり、涙したり、喜んだりする中で、心を一つにして発してくださる「アーミン」「アーミン」の言葉は、大きな励ましでした。

2017年からは、サハリンだけでなくロシア本土のハバロフスク、そして念願のユダヤ人自治区ピロピジャンへと導かれ、以後、ハバロフスク地域の教会を訪問する機会が増加。そんな中で、こうして皆様からの愛の献金をロシア極東の各教会や牧師、宣教師のもとにお届けするという活動を通じて、現地のクリスチャンに大きな励ましを与えられ、感謝が芽生え、彼らとの間に新しい関係が築かれ始めているのです。

ロシアのクリスチャンが日本のリバイバルを祈り、日本のクリスチャンがロシアのリバイバルを祈る。「日の上る極東の地のリバイバル」を求める共通の認識、それが「イスラエルの救いを祈る」働きにもつながっています。ハレルヤ！

4. ロシアにおけるユダヤ人

紀元後70年に祖国イスラエルを滅ぼされたユダヤ人は、2000年間にわたり流浪の民として世界中へ離散。それはロシア極東の流刑地であったサハリンにまでも及びました。

かつて、サハリンにはユダヤ人はいないと聞いていたのですが、現在約300名ほどのユダヤ人が存在しているらしいことが分かりました。同じロシア極東のカムチャッカ半島、ハバロフスクやウラジオストクといった都市部、さらにユダヤ人自治区のピロピジャンなどには、今もペレストロイカ運動の折にイスラエルに帰還できなかったユダヤ人が相当数存在しています。

こうした背景には、帝政ロシアやソビエト時代の迫害を恐れて身分を公表せず、ユダヤ人としての身分証明書を焼き捨てるなどで生命を守ったという歴史があります。皮肉なことに、これが原因で後の子孫たちは、自分たちがユダヤ人であることを証明できる資料がなく、イスラエルに帰還したくてもロシア政府から承認を得られないという苦境に立たされているのです。

では、そうした証明書がないユダヤ人たちは、いかにして先祖の地イスラエルに帰還できるのでしょうか。

「ある者は『私は主のもの』と言い、ある者はヤコブの名を名のり、ある者は手に『主のもの』とし、イスラエルの名を名のる。」(イザヤ44・5)

ユダヤ人に恵みと哀願の霊が注がれて、自分たちの真のアイデンティティーを聖霊様によって理解し、祖国へ帰還する。1930年代からイスラエルの救いのために積み重ねられてきた諸先輩たちの祈りは決して無駄ではなく、将来に神様の御業が現れるための摂理であったのです。

4. ロシア・サハリンにおける試練

しかしサタンは、「日の上る地域のリバイバルとイスラエルの





救い」、この二つの動きを阻もうと暗躍しています。イスラエルの救いの成就是キリストの再臨の実現につながり、それはサタンの敗北につながるからです。

2017年7月、プーチン政権下のロシアで「伝道規制法」が施行。キリスト教会に対する規制はさらに厳しくなりました。

まず、路傍伝道の禁止。通行人に話しかけて教会に招くことはおろか、もし通行人が伝道の言葉を耳にして写真に撮影し、警察や検察官に通報した場合、そのクリスチャンには重い罰金が科せられます。そして「教会が自分を派遣して福音を語らせた」と告白するなら、教会により重い罰金が科せられます。また、18歳以下の青少年が両親からの承諾書を得ず教会に出席している場合、一人当たり40万円の罰金が教会に科せられます。そのような罰金を払える経済力は、現地の教会にはありません。これは、教会を経済的に崩壊させることを意図したものです。

こうした締め付けの元、テレビではカルト的教会の危険について取り上げる報道が以前よりも増えています。「もしあなたが愛国者なら、ロシア正教会の信徒であるはずだ。ロシア正教会がなければ、我々の国は存在しない。ロシア正教会の存在無くして、ロシアはありえない」。こんなプロバガンダを流して、プロテスタント教会のイメージを「敵対者」として描くことで、国民を洗脳しているのです。

このように、キリスト教会に対する迫害は次第に厳しくなっています。しかし闇が濃くなる時期こそ、勝利の朝、キリストの再臨が近いのです。

「日の上る地域のリバイバルとイスラエルの救い」を覚えて、共に祈り続けましょう。

5. 第10回再臨待望聖会の恵み

今年の再臨待望聖会では、当初、講師としてサハリンからピーター・ヤルモリユク監督をお招きする予定でしたが、師のがんの治療スケジュールの調整が上手く行かず、急ぎよ来日がキャンセルされました。主の速やかな癒しがなされますよう、ぜひお祈りください。

代わって神様が遣わしてくださったのが、新宿シャローム教会名誉牧師の稲福エルマ師でした。また、サハリンからはエレナ・エレミーヴァ師、そしてエレナ・パンフィロヴァ姉妹をお招きして聖会が開催される運びとなりました。

稲福エルマ師は、計2回のセッションで、エステル書4章14節から「この時のために」というテーマでメッセージの奉仕をされました。アハシュエロス王をキリスト、王妃ワシュティを御心に沿わない花嫁、モルデカイを牧師、そしてエステルをキリストの花嫁なる教会に例え、終わりの日に私たち教会が進むべき道について、エステル記全体からとてもわかりやすく、しかも大胆に解き明かしてくださったのです。

ハマシ(サタン)のユダヤ人全滅計画を知ったモルデカイは、そのことをエステルに知らせ、次のように告げます。

「もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」
(エステル4・14)

このモルデカイのことは、今の私たちに向けて語られている神様のことばでもあります。

この危機的状況に対して、エステルは「たとい法令にそむいても私は王のところへまいります。私は、死ななければならないのでしたら、死にます。」(エステル4・16)と応答しました。

この厳しい時代にあっても、神様の召しに忠実に従って生きることの大切さを、稲福師はアピールされました。

エレナ師は最初の担当セッションで、ロシアのキリスト教会が置かれた実情について語っていただきました。ただ「バプテスマを授けた」という理由だけでKGBに逮捕された牧師の話をはじめ、そうした迫害がムルマンスクやカリニングラード、オムスク、アストラハン、ゲレンジ、カムチャッカ、サハリン等、ロシア全土に広がりつつあるとのこと。この霊的戦いのためにお祈りください。

さらにエレナ師は最終セッションにおいて、イスラエルの置かれた現状について語っていただきました。

今、ユダヤ人はメシアを受け入れる準備として、第三神殿の建設準備を進めており、神殿に使用する祭具はすべて揃っている状態です。しかも、神殿での重要な儀式に必要な「完全な赤毛の雄牛」が2000年ぶりに発見されたのです。さらに、大祭司の胸当てに使用されたと思われる石の発見など、終わりの時が進んでいることの兆しを知ることができました。

しかし、これらの準備が進むことは、預言の成就として、イスラエルに偽メシアが現れることを意味します。再びあのハマシの背後にいたサタンの計画が、ユダヤ人に向けて実行されようとしているのです。

神様によって「この時のために」選ばれ、キリストに仕える者とされた私たちには、「極東地域のリバイバルとイスラエルの救い」のために立ち上がる使命があります。エステルのように、キリストの忠実な花嫁として応答し、聖霊様の導きに従う命がけの信仰によってこそ、神様からの答えと勝利が得られるのです。

これからも、ロシア・サハリン宣教のために、お祈りとお支援を心からお願いいたします。シャローム!



イスラエルの重要性を学ぶ(5) 離散と回復の預言



シオンとの架け橋 石井田 直二

聖書研究会で行われた12回シリーズの学び「イスラエルの重要性を学ぶ」から、LCJE機関誌向けにリライトしてご紹介しています。今回の聖書箇所は申命記 32:21 の「彼らは神でもない者をもって、わたしにねたみを起させ、偶像をもって、わたしを怒らせた。それゆえ、わたしは民ともいえない者をもって、彼らにねたみを起させ、愚かな民をもって、彼らを怒らせるであろう」。この箇所は、ユダヤ人伝道のでよく引用されるローマ 11:11 「ユダヤ人にねたみを起こさせる」の出典です。

■不従順への警告から回復の物語へ

これは、約束の地を前にしたモーセの訓示の最後の部分「モーセの歌」の一部です。これを子供たちに教え、末代まで歌い続けるようにというのです。その歌は、レビ記 26 章、申命記 28～30 章にも語られた「従順であれば祝福されるが、不従順だと呪われ、諸国に散らされる」の総まとめのようにも見えますが、よく読むと、重大な違いがあります。

前述の2ヶ所は、イスラエルの民の行動に従って、従順なら祝福が、不従順なら呪いが与えられるとする条件的な預言なのですが、申命記 31:16,29 などを読むと、モーセは明らかにユダヤ人が神に不従順になると決めてかかっています。これは、不従順に対する罰則の警告というより、不従順をあらかじめ断定的に予告、あるいは預言するものです。イスラエルは約束の地で繁栄すると神を忘れ、神からの罰を受けて離散するが、やがて約束の地に帰される、という流れは不従順に対する警告というよりも、もはや「物語」というべきものです。この主題は、エゼキエル書 36 章、エレミヤ書 16 章など、預言書の中で何度も繰り返されて行きます。

注意して下さい。モーセの言葉を聞いているのは、エジプトを出て、荒野で神に逆らった人々ではありません。この時の聴衆の大半は荒野で生まれた世代なのですが、モーセは聴衆だけでなく、その子孫たちのことも語っています。もちろん、その子孫たちは「まだ、生まれもせず、善も悪もしていない」（ローマ 9:11）のに、彼らの不従順と罰、そして回復が宣言されるのです。

■神はわざと弱い者を選ばれた

神様は時々、わざと心が弱い人間を選ばれることがあります。大祭司という、とても重要な役職に任命されたのは、鉄人のような強さを持つモーセとは対照的に、軟弱なアロンでした。だから、出エジプト記 28 章で神がアロンを大祭司に指名されると、そのすぐ後の 32 章で彼は金の仔牛を作るという大罪を犯しています。ところが、40 章で彼は全く予定通りに大祭司に任職されるのです。そして、彼の子供たちも出来がよくありません。4人のうち2人は、神の命令に違反して、神に殺されています。

全てをご存じである神様は、アロンやその息子たちが弱い心の持ち主であることを見抜けずに「うっかりミス」で大祭司に指名されたのでしょうか。そんなはずはありません。山上で神がモーセに出エジプト記 28 章の部分を語っておられた頃、もう、山のふもとでは偶像が作られる寸前だったのです。全知全能の神が、それをご存じないはずはありません。それにもかかわらず、神はアロン一家を選ばれたのです。

■神の遠大なご計画

そこで私たちは問わなければなりません。神はなぜ、責任重大な「祭司の民」として、わざわざ「うなじのこわい」イスラエルを選び、その中でも重要な大祭司職に、よりによって心の弱いアロン家を指名されたのでしょうか。その秘密の一端は、ヘブル書 (2:17、4:14) で明らかにされます。祭司は人間的な「弱さ」を持つ必要があったのです。

さらに、パウロはローマ 9～11 章で、神がイスラエルを不従順の中に閉じ込め、それによって異邦人に福音が及び、さらに異邦人がユダヤ人にねたみを起こさせる、という神のご計画を見事に解き明かしています。興味深いことに、申命記 32 章の流れは、ユダヤ人が自ら悔い改めて神に帰るといふ筋になっていません。32:26-27 が転換点になっているのですが、神はユダヤ人の悔い改めによってではなく、「敵が誇る」つまり自分の名誉が汚されるのを恐れて、御心を変えられるのです。(エゼキエル 36:21 参照)

パウロはこの流れを、ローマ 11:11 で見事に解き明かしています。イスラエルの頑迷のおかげで私たち異邦人に福音が及び、異邦人がユダヤ人に「ねたみ」を起こさせる、という計画はパウロの「新発見」ではありません。約束の地に入る前に、すでに明らかにされていたのでした。そして、モーセの歌の最後の一節は「国々の民よ、主の民のために喜び歌え」（32:43）であり、これは異邦人の救い（ローマ 15:10）です。異邦人が救われることによって、イスラエルがねたみを起こし、ユダヤ人が救われることで異邦人に祝福が及ぶとは、何と美しい神のご計画ではないでしょうか。

LCJEは、ユダヤ人伝道団体の情報交換ネットワークです。加盟しているユダヤ人伝道団体それぞれの立場・活動を尊重して、機関紙などに情報を掲載しています。しかし特定の立場・教理などを、LCJEとして支持するものではありません。読者におかれましては、個々の見識によって提供される情報を判断していただきますよう、お願いいたします。

2020年度祈禱会予定

場 所	1月	2月	3月	会 場
大阪(6:30より)	9日	13日	12日	北浜スクエア(VIP関西センター8F)
東京(1:30より)	11日	8日	14日	御茶ノ水クリスチャンセンター 8F 811号室

【大阪祈りにご参加される方へ】第二木曜日午後6時半開始です。

【東京祈りにご参加される方へ】ご注意ください▶通常祈りの会場は、811号室ですが、変更される場合があります。階下の掲示板をご覧ください。

Tokyo 2020
World Mission Conference

世界宣教会議 東京 2020

～世界宣教の達成とイスラエルの救い～
Back to Jerusalem and Accomplishing World Missions

2020年 **4月30日(木)**～**5月3日(日)**

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、
信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。

ローマ人への手紙 1章 16節

講師：ダニエル・ジャスター / エレズ・ソレフ / ノアム・ヘンドレン / バルーフ・コールマン
場所：ウェスレアン・ホーリネス教団 淀橋教会 / 参加費：3,000円
【詳しいお問い合わせ】担当：石野様 / ☎ 080-5133-4620 / Eメール：mtcokuyama@gmail.com

LCJE日本支部2019年10月度会計

収入・献金		支出・現金	
科 目	金 額	科 目	金 額
献 金	146,780	事 務 費	12,800
大阪祈り会席上献金	20,000	NEWSレター製作費	50,120
		郵 送 費	40,000
		郵便振替手数料	4,600
		通 信 費	5,500
		賃 借 ・ 管 理 費	22,000
		高 熱 費 ・ 共 益 費	9,880
		交 通 旅 費	7,000
		祈 り 会 経 費	14,000
合 計	166,780	合 計	165,900
		差 引 残 高	880
前月よりの繰越	23,433	翌月への繰越	24,313

事務局よりのお知らせ

LCJE日本支部では、皆様からの御投稿をお待ちしています。インターネットでの御投稿、原稿用紙での御投稿いずれも大歓迎いたします。文字数は2000文字前後でお願いいたします。投稿記事は、封書で送っていただくか、LCJEJAPAN@HOTMAIL.COM 又は **FAX 072-867-6721** まで。宜しくお願い致します。

編集後記

世界中が落ち着かない年末を迎えることになり、より一層主の期待されていることを忠実に実行することを祈りつつ主がこの世に来てくださったことを覚えて感謝する時とさせていただきます。今月もイスラエルの政治、中東の情勢を覚えて祈りくださいますように。2019年度もこのように毎月興味深いニュースレターをお届けできた幸いを感謝します。2020年度も特に編集作業の労苦のこと、経済的な祝福を覚えてお祈りください。引き続きまだ主とお出会いしてないユダヤ人には一日も早く主とお出会いし救い主を受け入れ、救われます様にお祈りください。心注いでイスラエルの平和を執り成しお祈りいたしましょう。コ・ワーカーお一人お一人に主の祝福がありますように。よき新年をお迎えください。シャローム LCJE日本支部事務局長 高瀬真理

LCJE日本支部は、皆様の尊い献金で支えられています。感謝